

## 永井隆はいかにしてカトリック信者となったか

著者	小西 哲郎
雑誌名	長崎外大論叢
号	16
ページ	73-86
発行年	2012-12-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1165/00000098/">http://id.nii.ac.jp/1165/00000098/</a>



# 永井隆はいかにしてカトリック信者となったか

小西哲郎

## How Takashi Nagai Became a Catholic

KONISHI Tetsuro

### Abstract

In this article, the author explores the probable causes for the conversion to Catholicism of Takashi Nagai (1908-51), a nuclear physicist and author who was wounded in the atomic bombing of Nagasaki in 1945.

Nagai was born and raised in a family which was affiliated with the Izumo-Taisha Shinto shrine. In his youth, he committed himself to the study of natural science. Following his mother's death, however, his interest in spirituality increased, and through reading the Pensées of Blaise Pascal he became fascinated by Catholicism. Through his involvement in the daily life of the Catholic community of Urakami (Nagasaki's main Catholic district), he was lead towards conversion. A direct factor in this was undoubtedly his marriage to Midori Moriyama, an Urakami Christian at whose house Nagai had been boarding. In this paper, the author proposes one further additional factor in Nagai's decision to convert: namely, his mother's death, which for him constituted a spiritual turning point.

### はじめに

長崎の原爆で被爆した医師、作家の永井隆（ながい・たかし、1908-51年）は、熱心なカトリック信者であった。代表作の『長崎の鐘』をはじめ、かれの作品にはかれのキリスト教信仰がいろいろあらわれている。永井の作品を宗教ぬきで論じることはできないといってもいいすぎではない。

永井はカトリックの家庭に生まれ幼児洗礼をうけた、生まれながらのクリスチャンではなかった。かれは神道の家庭に生まれ、青年時代に自然科学をまなぶ過程では唯物論に傾倒した。そしておとなになってから、カトリックに改宗したのである。つまり永井にとってカトリック信仰は、空気のようにまわりをとりかこみ、成長する過程で自然に身についたものではなく、紆余曲折をへておとなになったかれが自覚的にえらびとったものである。ではかれの改宗の動機はなんだっただろうか？どのようにして、またなぜ永井はカトリックに改宗したのだろうか？永井の改宗の理由をたずねることは、かれの作品を理解するうえでかかせない重要なといであろう。

この論文は、永井隆がカトリックに改宗するまでのプロセスを整理して、かれがなぜ、どのようにして改宗したのか、その理由を考察する。1章では、永井の幼少青年期の宗教的環境と思春期における唯物主義への傾倒について論じる。2章では、永井がカトリックそして原爆ともであうこととなった、いかえれば運命のわかれみちとなった、永井の長崎へのひっこしの理由をさぐる。3章では、永井の内面的な改宗の要因、すなわち唯物主義をかたく信じていた永井が、精神的な世界に目をひら

かれ、カトリシズムに接近していった理由を検討する。4章では永井の外面的な改宗への要因、すなわちカトリック信者の女性との結婚にいたる、永井の浦上カトリック共同体とのあいについてかんがえる。最後に5章では、それらの因果関係をまとめる。

おもな資料は、永井隆の『亡びぬものを』、『ロザリオの鎖』（いずれも『永井隆全集Ⅲ』に所収）、および永井についてのふたつの伝記、すなわち片岡弥吉（かたおか・やきち）の『永井隆の生涯』と永井誠一（ながい・まこと）の『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』である。これらの資料をもちいるにあたっては、かかれていることを文字どおりにうけとるわけにはいかない。その理由のひとつは、とくに永井自身の作品をもちいるときにあてはまることであるが、永井の記述は、それがかかれた時点（つまり原爆後、戦後）で、永井がそのできごとをどのように思想化し意味づけていたかをしめすものであって、そのできごと当時の永井の思考のあらわれではないからである。もうひとつは、それとも関係があるが、過去のできごとは、思想化され、かたられるにあたり、美化される傾向が一般にあるからである。つまり永井がかいていることをそのまま事実としてうけとるのではなく、それらが思想化されるなかで、こうむった変化を考慮し、その核心にある事実にせまらなければならないのである。

## 1. 幼少青年期の永井の宗教的環境と精神的成長

### 1.1 イエの宗教としての神道

永井隆は1908年2月3日、島根県松江市で父寛（のぶる）、母ツネの長男としてうまれた。永井がうまれそだった家庭は「熱心な出雲大社（いずもたいしゃ）教の家庭」であったと永井のむすこの誠一（まこと）はのべている。<sup>1</sup>しかし永井自身は、その宗教についてほとんどなにものべていない。

たとえば1939年に寛が死んだとき、葬儀は永井家の宗教にのっとって神式でおこなわれた。当時永井は日中戦争で出征し不在であったため、まだ4歳だった誠一が喪主をつとめた。誠一自身は、その「出雲大社教式でおこなわれた葬儀は、私がふだん見慣れていた、長崎市内におけるカトリックの葬式とはまったく異なったものであり、驚きだった」とのべている。<sup>2</sup>しかし永井自身は、その葬儀について『いとし子よ』でふれてはいるものの、その宗教については、なにもいわない。<sup>3</sup>永井にとって神道は「イエの宗教」以上のものではなく、永井の幼少青年期の精神的成長におおきな影響をあたえてはいないようである。

### 1.2 唯物主義への傾倒

中学、高校時代、永井は唯物主義に傾倒していった。1925年に松江中学（旧制）を卒業し、松江高等学校（旧制）理科乙類に入学した永井は、自然科学に魅力を感じるようになり、自然科学こそ宇宙の真理をつかまえることができる手段であるとかんがえるようになったのである。<sup>4</sup>永井は「高等学校で唯物論のとりこになっていた」とのべている。<sup>5</sup>当時のいわゆる「大正デモクラシー」のリベラルな風潮も、永井の自然科学、唯物主義への傾倒をあとおしした。<sup>6</sup>

そして1928年、松江高等学校を首席で卒業すると、永井は父おやとおなじ医学のみちにすすむことをころごし、長崎医科大学（旧制）に入学した。そこで永井はますます自然科学にのめりこんでいった。自然科学の研究対象は物質であり、そこでは人間の生命現象もすべて物質のはたらきとして説明される。これに感嘆した永井は、真理を探究する医学研究者へのみちにすすんだ。<sup>7</sup>

## 2. 永井が長崎医大に進学した理由

ここで永井がなぜ長崎医大に進学したのか、その理由をかながえてみる。なぜそれを問題にするかというと、永井の思想を特徴づける「カトリック」「原爆」といういずれの要素も、長崎の特殊性に由来するからである。逆にいえば、長崎に移住しなかったなら、永井はカトリックに改宗することもなく、原爆にあうこともなかったであろう。そうであればその「永井」という人物は、もはやわたしたちが知る永井隆はではない、という意味で、長崎への移住がかれの人生を決定したできごとだからである。

### 2.1 「神の摂理」の発端としての長崎

キリシタン研究者で、永井の敬愛する友人でもあった片岡弥吉(かたおか・やきち、1908-80)も、永井の死の10年後にかいたかれの伝記のなかで、永井が長崎医大に進学した理由に疑問を呈している。<sup>8</sup>そしてその理由はわからないとしつつも、片岡は「結果から見てこれはくすしき神の摂理であったようにさえ考えられる。永井さんがもし、長崎医大でなく、他の大学を選んでいたら、今日の永井さんはできなかったであろうから」とのべている(下線は筆者による)。<sup>9</sup>

永井が長崎にきたことが「くすしき神の摂理であった」と片岡がここでのべているのは、原爆が長崎におとされたことが「神の摂理」であると永井がのべたことを念頭においたものであろう。長崎への原爆投下が「神の摂理」であるという永井独自の解釈は、永井しかいわなかったことであり、永井にしかいえなかったことである。そしてそのような解釈は、さきにものべたように、永井が浦上のカトリック共同体、そして原爆というふたつの要素とであってはじめて誕生した。したがって長崎への原爆投下が「神の摂理」であるならば、そもそもその「神の摂理」の発端は、永井が長崎にきたことにあったということを片岡は指摘しているのである。つまり片岡は、原爆についての永井の解釈の延長線上で、このようにのべているといえる。「今日の永井さん」、すなわち「カトリック」「原爆」という永井の文学を特徴づける要素が、長崎に由来することを、片岡はよく理解している。

### 2.2 医学者になるゆめ

「永井は長崎医科大学を志望した理由について、両親や弟妹、幼な友達、学友にもはっきりと話していないし、一切書き残していない」と永井誠一はのべている。<sup>10</sup>

そのうえで永井誠一は、永井が長崎医大に進学した理由として、なんんかのことばを紹介している。そのなかでもっとも信頼できそうなものは、永井隆のおとうとで、長崎市永井隆記念館の館長であった永井元(ながい・はじめ、1913-93)がつたえるものである。永井元は、松江高校理科乙類時代の永井の同期生が、かたったことを紹介している。それによると永井は、医学者になる自分のゆめを実現できる可能性があるというきわめて現実的な理由で、長崎医大に進学したという。<sup>11</sup>また長崎は、父おやの寛がかつて医術開業試験をうけて医師の資格をえたゆかりの地でもある。<sup>12</sup>進学する医学校をきめるにあたり、医師であった父おやと相談し、その助言をうけることは自然であり、これは十分にありえるはなしである。

また永井誠一は、永井隆が長崎医大に進学した当初、小学校時代の恩師「金築先生」の自宅に下宿していたことに注目している。<sup>13</sup>この金築氏は当時、長崎県立長崎高等女学校(旧制)の教諭であり、長崎市鳴滝(なるたき)にすんでいた。その金築氏をたよって、永井は長崎にひっこしたのである。

松江から長崎医大に進学するのであれば、当然、下宿しなければならない。そして当地にしりあいがいるということは、下宿という現実的な問題の解決にプラスにはたらいたであろう。

さらに鳴滝は、江戸時代にシーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796–1866) が鳴滝塾をもうけて、近代西洋医学、科学をつたえた、日本における西洋医学発祥の地としていられている。そのことも永井の念頭にあったのではないかと永井誠一は推測している。このことも、長崎のイメージをアップにつながった可能性がある。

### 2.3 長崎がさきか、カトリックがさきか

ところで郷土資料の収集家で、当時島根県立出雲工業高校図書館長であった馬庭将光氏が『山陰中央新報』(1988年3月7日)に寄稿した「松高弓道部誌は語る——故・永井博士の長崎医大志望動機」という記事を永井誠一は紹介している。<sup>14</sup>その記事には、松江高校の教師にプロテスタントの信者がいて、自宅や教会でキリスト教の講話会をひらいていたこと、また永井隆がその講話会にときどき参加していたこと、そして長崎医大入学後、宗教はカトリックにかぎるという内容のてがみとその教師あてに永井がおくっていたことがしるされていたという。そしてこのプロテスタント信者の教師の講話で、長崎のカトリックのことがはなされていたことが、永井の長崎医大志望の動機ではないかと馬庭氏は推測する。しかし後述するように、それはありえない。馬庭氏の推測だと、まだ松江にいたときに長崎のカトリックのことをきいたことが、永井の長崎医大志望のきっかけになったことになる。つまり馬庭説は「カトリック→長崎」の順序である。しかし永井は、あとでのべるように、長崎にきたあとでカトリックに関心をもちはじめるので、実際には「長崎→カトリック」の順である。事実、永井は長崎医大生になったばかりのころはまだ科学主義、唯物論の信奉者であり、カトリックを軽蔑してさえいた。<sup>15</sup>松江高校時代に永井が長崎のカトリックのことをきいたというのが事実であったとしても、それが当時の永井の進路を左右する材料にはなつたとはかんがえられない。

### 2.4 そのほかのプラス要因

そのほか、おもな理由ではないが、永井が長崎医大をえらぶにあたってプラスに作用したかもしれないほかの要因をあげておこう。それは、歌人でもあった精神科医の斎藤茂吉 (さいとう・もきち、1882–1953) が、長崎医大の前身である長崎医学専門学校で教鞭をとっていたことである。茂吉は1916年12月から1921年まで同医専の精神病科の教授であり、在職中に短歌グループ「アララギ」の支社をつくった。

永井は歌人でもあった。小学生のころから詩句の創作に興味をもちはじめ、松江高校時代には短歌会にはいっていた永井は、長崎医大が斎藤茂吉ゆかりの医学校ということも知っていたはずである。実際永井は、長崎医大入学後その「アララギ」に入会し、たくさんの短歌や俳句、長短歌などをつくった。<sup>16</sup>そのおおくは歌集『新しき朝』に収録されている。<sup>17</sup>茂吉ゆかりの医学校であったということも、永井が長崎医大をえらぶことをあとおしした可能性がある。

同様に、永井が長崎のエキゾチックな魅力にひかれたという説もある。<sup>18</sup>長崎の異国情緒も永井にとってマイナスには作用しなかったであろう。

## 2.5 まとめ

以上をまとめると、自然科学につよい関心をもった永井は、高校時代に医学研究者になるゆめを持ち、それを実現できる可能性がたかいという理由で、長崎の医大に進学したというのが実態に一番ちかいののではないかとおもわれる。永井は自分の進学さきを父おやとも相談して、下宿を提供してもらえそうな小学校時代の恩師もあり、父が医師の資格をえたゆかりの地でもある長崎の医学校を進学さきとしてえらんだのではないだろうか。

「永井は自分の過去について詳しく書いているが、肝心な長崎行きの箇所は見当たらない」と永井誠一はのべている。<sup>19</sup>なぜ永井が長崎医大に進学したか、その理由を永井はかたらない。それはきわめて現実的、世俗的な自分の進学さき決定の事情を、かたりたくなかったということなのではないかとおもわれる。自分が長崎にきた真の理由は、おもしろみにかける、あるいは世俗的すぎて、「神の摂理」をかたった永井のものがたりに対する美学にあわないということだろうか。いずれにせよ長崎への移住は、カトリック、そして原爆とのあいという、永井の運命を決定づけた「神の摂理」におおきくかかわるできごとである。その発端である長崎医大への進学理由を、永井はベールつつんでいる。

## 3. 改宗の内面的要因

### 3.1 母の死とスピリチュアルな関心へのめざめ

長崎医大に入学した永井は、大学で医学をまなび、ますます唯物論的世界観をつよくした。『ロザリオの鎖』には、大学に入学後の永井がまったくの唯物論者、無宗教であったことがしるされている。<sup>20</sup>

そのように唯物的世界観にどっぷりとはまりこんだ永井であったが、大学3年にあがるはるやすみ(1930年3月)に母ツネの死に接して、靈魂の存在を直観的に感じとったという。このできごとが永井をスピリチュアルな世界にめざめさせたきっかけとなった。<sup>21</sup>それ以来、永井のもののみかたがかわった。人間が靈をもつ存在であるとかんがえるようになったのである。<sup>22</sup>

### 3.2 パスカルの『パンセ』によるカトリックへのみちびき

『ロザリオの鎖』は、母の死をきっかけに永井が人間を靈的存在とかんがえるようになったことと、パスカル(Blaise Pascal、1623-62)の『パンセ』(*The Pensées*)を手にとったことがつづけてかかれており、それらのあいだに時間的なへだたりはほとんどないような印象をうける。『パンセ』をよんで、「古今無双の知者」にして「われわれの先輩、大物理学者」であるパスカルが、いままで自分が軽蔑していた「靈魂、永遠、神」などを「まじめに信じていた」ことに永井はおおきな衝撃をうけた。そして「科学者パスカルが彼の科学と何の矛盾もなく信じていたこのカトリック教とはどんなものであろうか?」という興味から、永井は「おのずからカトリックに引きつけられていった」とのべている。<sup>23</sup>精神的な成長のプロセスという点では、「母の死」→「スピリチュアルな世界への関心」→「パスカル」→「カトリック」というながれは不自然ではなく、おおよそ事実とかんがえていいようにおもわれる。すなわち、内面的な変化に関していえば、母の死をきっかけにスピリチュアルな世界にめざめた永井は、パスカルの『パンセ』をよんで、カトリックに関心をもつようになったといっ

#### 4. 改宗の外面的要因

永井の作品がかかれた当時の長崎市は、おおきくふたつの地区にわけることができる。長崎港にひがしからながれこむ中島川（なかしまがわ）流域と、きたからながれこむ浦上川流域である。このふたつの流域は、金比羅山（こんぴらさん）という366mのやまでへだてられている。永井がはじめ下宿していた鳴滝をふくむ中島川流域は、出島（でじま）を中心としたみなとまちとして、ふるくから外国との交易で発展してきたところで、今日も長崎県庁や長崎市役所その他の官公庁があつまり、長崎の旧市街地をかたちづくっている。一方、長崎医大があった浦上川流域は、もともと浦上山里（うらかみやまざと）村というべつの自治体で、1920年に長崎市に編入されたものであり、まちの雰囲気やひとびとの生活文化が長崎の旧市街とはことなっていた。<sup>24</sup>その後、市街地が浦上川流域に拡大していったため、今日ではこれらのふたつの地域のさかいめはあいまいになってしまったが、永井は当時のこの中島川流域と浦上川流域とのちがいを「港町としての長崎」と「信仰の長崎」、また「エロスのまち」と「マリアのまち」とよびわけている。<sup>25</sup>

ここでは永井が中島川流域の鳴滝から浦上川流域に下宿をうつした理由を考察する。永井の思想の形成に、浦上のカトリック共同体はきわめておおきな影響をあたえている。そしてのち1945年に原爆が投下されたのも中島川流域ではなく、この浦上川流域だった。その意味では、永井の運命の岐路となったのは、広義では松江から長崎へひっこしたことであったが、狭義では長崎市内で鳴滝から浦上にひっこしたことにあったのである。

##### 4.1 永井が浦上にひっこしたのはいつか

では永井はいつ浦上にひっこしたのか？ 自伝的小説『亡びぬものを』の冒頭に、

一昨年の春、母を脳溢血で亡くしてから、父ひとりが、隆吉の医師免許証を見たら喜んでくれるはずの人であった。来年の春には長崎の医大を卒業して、その免許証がもらえる。それまでは生きていてほしかった。<sup>26</sup>（下線は筆者による）

という記述がある。これは、大学のふゆの「休みに入って四日目」に隆吉（＝永井）が帰省するばめんとしてえがかれており、そのあとに、浦上へのひっこしの記述がつづく。ここから、永井の浦上へのひっこしが、母の死（1930年3月29日）のあとで、大学卒業（1932年3月25日）まえであったことがわかる。

ところが、うえの引用箇所におけるふたつの下線部は、時間的につじつまがあわない。この時点で母の死が「一昨年の春」のことだとすると、これは1932年のことになる。また「来年の春」に大学を卒業するとなると、これは1931年となり、このふたつの記述は矛盾するのである。

ところで、『亡びぬものを』で永井は、あたらしい下宿さきの森山（もりやま）家にもつをはこびこんだのがちょうどイースターだったとかいっている。<sup>27</sup>ちなみに1930年から1932年までのイースターのひづけは、1930年4月20日、1931年4月5日、1932年3月27日なので。このうち永井が大学を卒業するまえとなると、1930年か1931年のどちらかということになる。浦上へのひっこしが母の死からさほど時間がたっていないとかがえるなら、それはおそらく永井が大学3年生のはる、1930年4月であり、卒業にちかい時期とかがえるなら、大学4年生のはる、1931年4月である。ここでは、

つぎの項でのべる理由によって、永井が浦上にひっこした日づけを、1931年4月5日と推定する。

#### 4.2 永井が下宿を浦上にうつした理由

ではなぜ永井は下宿を浦上にうつしたのだろうか？かつてカトリック信者たちを「旧式の信仰にだまされている西洋人の奴隷の群」だとさげすんでいた永井は、「パスカルによってすっかり私の思想を破壊しつくされるに及んで、あらためて天主堂を見直し始めた。そしてついに、下宿を浦上に移したのであった」とのべている。<sup>28</sup>カトリックに関心をもったために、浦上に下宿をひっこしたようにもよめる。

たしかに長崎医大があった浦上川流域は、ふるくからのキリシタンのさとで、浦上天主堂を中心とする、カトリック信者の集住地区である。しかしカトリックへの興味ゆえ、永井が下宿を浦上にうつしたとは、かんがえにくい。なぜならカトリック教会は、長崎で浦上川流域にしかなかったわけではないからである。幕末に「キリシタン発見」の舞台となった大浦（おおうら）天主堂（カトリック大浦教会）をはじめ、カトリック教会は中島川流域にも当時もあった。カトリックに興味があっただけなら、わざわざひっこさなくても、下宿のちかくのカトリック教会にいけばいいのだ。永井が浦上に下宿をひっこした理由は、別にあったとかんがえるほうがよさそうである。

ではその理由はなにか？永井はそれを母の死と関連づけて、このようにのべている。

街の明け暮れは騒がしかった。母が亡くなって、すっかり乱れた心を鎮めるには、山の暮らししかなかった。私は逃げ込むように、浦上の田舎に隠れたのであった。<sup>29</sup>

つまり、母おやがなくなり、ころをおちつかせるために、しずかな浦上にひっこしたという。これはかんがえられないことではないが、ひっこしする理由としては、やや不自然な印象をうける。ただ、ひっこしたのが母の死後さほど時間がたっていない時期であることは、事実とかんがえていだろう。

一方、前項でもふれた『亡びぬものを』冒頭の帰省のばめんにつづけて、永井は浦上へのひっこしについて以下のようにしるしている。

隆吉は下宿を浦上に移して、大学生最後の勉強に没頭した。それまでは家庭教師をしていたが、そのために相当の時間を失うし、小学校六年生の女の子を受け持っていたので、裁縫の指導などうまくいかなかったから、やめてしまった。おくみ、えりおくりなどという用語は、字引をひいただけではわからなかった。また、浦上に移ったのは、宗教的な意味もあった。<sup>30</sup>

ここでは、はっきりといわれてはいないものの、勉強時間の確保が、浦上にひっこした主たる理由で、宗教的な意味あいが副次的な理由とされている。たしかに大学のちかくにひっこしたことで、毎日の通学時間はかなり短縮されただろう。しかしここでは母の死についてはなにもふれられていない。

このように、永井が浦上に下宿をうつした理由は、母の死と関係があるのか、勉強時間確保のためか、はたまた別に真の理由があるのか、釈然としない。この記述は、浦上に下宿をうつした理由に永



井自身が「宗教的な意味」をあたえようとしているだけで、現実にはカトリックへの興味から転居したのではないとかがえるほうがよさそうである。

以上みたように、永井が長崎医大を志望した理由とともに、かれが浦上に下宿をうつした本当の理由もよくわからない。ただ「明らかに浦上に住み始めて後、永井の中に宗教的思想が芽生えたのであった」と永井誠一はのべているように、<sup>31</sup>おおきなながれとしては「浦上へのひっこし」→「カトリック」であって、「カトリック」→「浦上へのひっこし」ではないとおもわれる。

#### 4.3 浦上のカトリック共同体とのあい

浦上で家畜の売買と農業をいとなむ森山貞吉の自宅二階に永井は下宿をひっこした。<sup>32</sup>『亡びぬものを』で永井は、その浦上という土地がらと森山家をこのように紹介している。

浦上は、教会迫害史において有名なキリシタン地区である。大学の北に接して東洋一の大天主堂が赤れんが造りの巨大な姿を見せ、それを中心にキリシタンが約一万人住んでいた。それは、豊臣時代からの信仰を幾度かの大迫害にもめげずに守り通してきた家系であった。<sup>33</sup>

森山家は貞吉、ツモ夫妻と、一人むすめの緑(みどり)の3人家族で、キリシタンの家系であった。禁教の時代は「帳方」(ちょうかた)、すなわち教会暦や地域の信徒名簿の管理をになう、潜伏キリシタン組織のリーダーを代々つとめてきた、すじがねいりである。<sup>34</sup>その家庭に下宿した永井は、いのりを中心とした家族ぐるみ、地域ぐるみの信仰生活をまのあたりにした。永井は、当時の浦上のカトリック信者たちの天主堂を中心とした生活をえがき、このようなカトリックの宗教生活にあこがれをもつようになったとのべている。

浦上人の生活は祈りに明け、祈りに暮れた。生活そのものが祈りだった。祈りを離れて生活はなかった。目が覚めると床の上に座って起床時の祈り。寝る前には床に座って就床時の祈り。その間に朝と夕と二回長い祈りがあり、朝昼夕の三回天主堂から鳴り渡る鐘に合わせて祈るお告げの祈り、それは『主のみ使いの告げありければ……云々……』ということば、ラテン語ではアンゼラスということばで始まる祈りだから、一般にはアンゼラスの鐘で知られている。そのほか、何であれ一仕事するときには始業前の祈り、終業後の祈りをとなえ、三度の食事には食前食後の祈りをする。ただ一ぱいのお茶を飲むときにも、一服の薬を飲むときにも、『聖父と聖子と聖霊とのみ名によりて、アーメン』と祈って、右手を額、胸、左肩、右肩の順に動かし、己が体に十字架のしるしをするのであった。これは、いっさいの思い、ことば、行ない、および苦しみを、神のご光栄のために献げる生活であったからである。

そのほか、仕事の間にもしばしば短い祈りをとなえた。祈りとは神との会話である。つねに神とともにある者は、いつでもどこでも神と語ることができた。浦上人がもっとも好んでよくとなえたのは、ロザリオの祈りである。これは聖母マリアに献げる祈りのバラの花環の意味で、じゅずをつまぐりつつ祈った。村人はよく祈るので、珠は光り、鎖はさびていなかった。

天主堂では毎朝ミサ聖祭が行われた。日曜日や祝日には全信者がミサに参るので、美しく、またにぎやかだった。日曜日や祝日には聖体降福式も行われた。村人はそれを「御みょうが」と名

づけていた。聖体こそは教会の生ける心臓である。それは、パンの形色の中にこもりまします生けるイエズス・キリストであったからである。聖体はつねに天主堂の祭壇に奉安されてあった。村人はかわるがわるお参りして聖体を訪問し、親しくキリストと会話をしていた。

朝まだ暗い五時半、天主堂からカーン、カーンカーンと三つずつ間をおいて三回、それから続けて二十ばかりも鳴り渡ってくるアンゼラスの鐘に隆吉が目をさますと、階下で家畜仲買人の一家が祈りをとなえていた。祈りはいずれも二つに分かれ、子どもの澄んだ声が前半をさきあげると大人のだみ声があとに続き、幼い声と老いた声とがかわるがわる神に対する信望愛の真情を吐露し、ときどきアーメン（そのようになりますように）とねだっていた。それをじいっと聞いていると、先祖代々この信仰を生活の基盤としてきた村人の霊的な幸福が直感され、霊的に無知な我が身の不幸を隆吉は悲しまずにはおられなかった。しかし、そのころ隆吉が抱えているのは追われてしまった樂園に対する郷愁にすぎず、宗教情操へのあこがれであったようである。<sup>35</sup>

また永井は無宗教の自分をかえりみ、ただしい宗教をもつことの大切さをしり、やがてカトリックがそのただしい宗教であるとかんがえるようになった。

牛は靈魂をもっておらず、自由意志もなく、ただ本能のみで行動をしていたが、それでもこの世に生まれ出た意義を自ら知り、死生の大問題についてまどわず、不平も不満も不幸も訴えず、泰然としていたので、隆吉はそれを見るたびに、人生の目的もつかまず、確固たる死生観もなく、つねに不平と不満と不幸とにさいなまれて不安な自分を省み、我は人間ながら牛よりもみじめだと思うのであった。そして、これこそは正しい宗教に帰依していないためだと知った。この村人の信奉しているのは、たしかに正しい唯一の宗教にちがいない。なぜならば、その信仰を守るために、あんなに多くの人が肉親の生命を奪われても悔いなかったから。人間がこの大切な生命を偽の教えのために献げるとは考えられない。<sup>36</sup>

そして1932年3月、永井は長崎医大を卒業し、4月には物理的療法科（現在の放射線科）の副手として大学に職をえた。8月には徴兵検査に甲種合格している。そのとしのくれ、永井は主人の貞吉からクリスマスのミサにさそわれる。そしてはじめてミサに参加した永井は、そこに「全能者の生ける体がある」と直感し、その全能者によってすぐわれることをさとったという。<sup>37</sup>このあたりの永井の独白は、のちに信仰的に成長した永井の思想を相当に反映しているようであり、それを考慮する必要がある。しかし浦上のカトリック信者宅での下宿生活ととおして、永井がカトリックの信仰生活になじんでいったことは、まちがいないであろう。

#### 4.4 森山緑との結婚

はじめてミサに参加した1932年のクリスマスの翌日のよる、下宿さきのむすめ森山緑が盲腸炎による腹痛をおこし、永井はかの女をせおって大学病院まであるいていった。これは、のちにつまとなるかの女と永井がしたしくなった象徴的なできごとであった。<sup>38</sup>

翌1933年2月、永井は陸軍軍医候補生として広島歩兵第11連隊に入隊する。当時、在郷婦人会などは、戦地の将兵を激励するために慰問のしなをおくることを銃後の住民に奨励していたが、緑は永井

への慰問袋のなかに手ぶくろやくつしたとともに『公教要理』をいれておくれた。永井はそれをよみ、その内容のふかさにおどろき、またわが身をかえりみてはじいったという。<sup>39</sup>永井のこの出征中に、浦上の下宿の主人で、緑の父の貞吉は病死した。

翌1934年5月、1年2か月の任務をおえて、永井は長崎にかえってきた。しかしそのとき永井は、以前のつまぶかいきかたをあらため、カトリックの洗礼をうけて、あたらしくいきようというおもいになっていたという。<sup>40</sup>受洗をかんがえていたということは、このときすでに永井が森山緑との結婚を決意していたことを示唆している。なぜなら当時、カトリック信者は、信者同士の結婚しかみとめられていなかった。<sup>41</sup>カトリック信者である森山緑と結婚するために、永井はカトリックに改宗する必要があったのである。そして森山緑が慰問袋に『公教要理』をいれておくれたのは、結婚の必要条件である永井の改宗というステップをクリアするためであった。

だとすると、永井の出征まえに、永井と緑はおたがいを将来の結婚あいてとして意識していたとかんがえたほうがよさそうである。事実、『亡びぬものを』に、出征のまえの晩、春野（＝森山緑）が隆吉（＝永井）に手あみのジャケットをてわたし、そのとき隆吉が春野にキスをするというばめんがえがかれている。<sup>42</sup>

そして軍隊からかえってきた隆吉（＝永井）が、出征に際して春野（＝森山緑）からもらった例の手あみのジャケットをかえしたことにつづけて、改宗のため永井が浦上天主堂をおとずれたことがかかっているのも、永井の改宗の直接の動機が緑との結婚であったことをほのめかしている。<sup>43</sup>実際、兵役からかえってわずか1か月ほどで、永井は浦上天主堂で畑田神父から洗礼をうけ（1934年6月、霊名はパウロ）、さらにその後2か月ほどでマリナ森山緑と結婚した（同年8月）。この洗礼と結婚との間隔のみじかさも、永井の受洗が結婚の前提だったことをあらわしているといえよう。<sup>44</sup>

## 5 まとめ

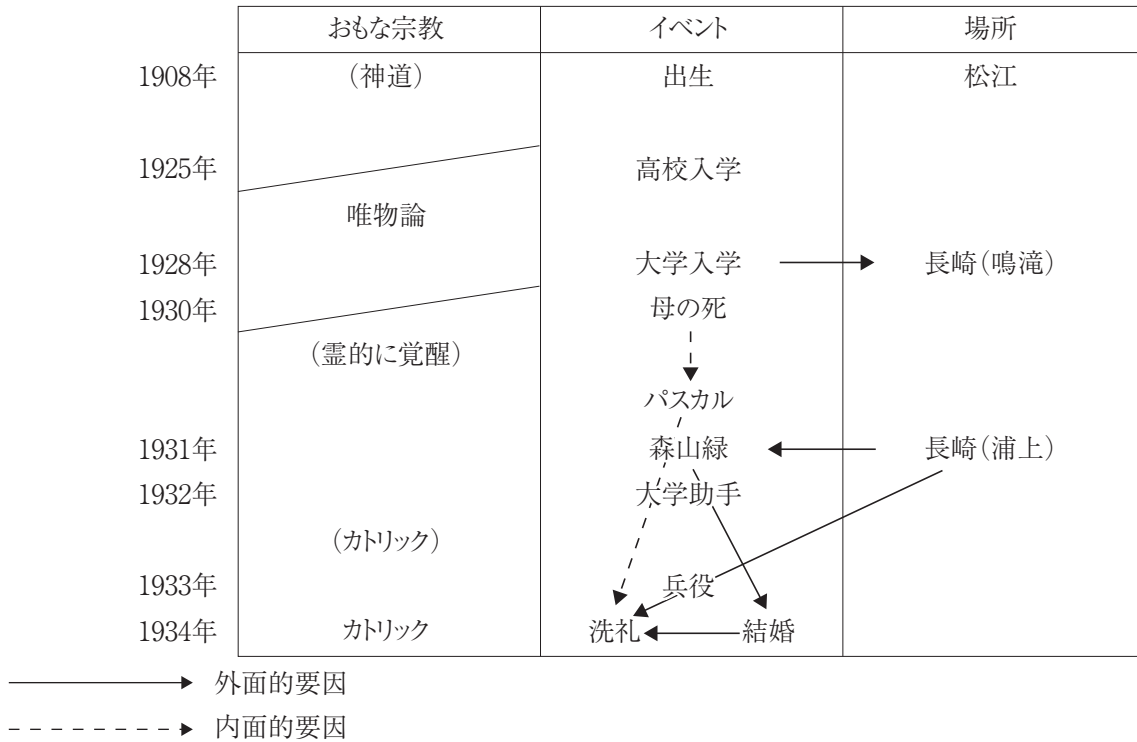
以上、まとめると、永井隆がどのようにしてカトリック信者となったかは、以下のように整理することができよう。（やじるしは因果関係）

すなわち、永井隆がカトリックに改宗した直近の要因は、下宿さきのむすめ、森山緑と結婚するためであった（したがって図の因果関係では、結婚→洗礼となっている）。永井は結婚の前年（1933年）に兵役についているが、その出征まえ（1932年後半？）にすでに森山緑との結婚（＝カトリックへの改宗）を意識していたとおもわれる。これは外面的な要因の系譜である。

一方、内面的な要因に目をむけると、唯物主義につよく影響されていた永井が、スピリチュアルな世界に関心をもつようになったきっかけは、母ツネの死であった。そしてパスカルの『パンセ』などをよみ、永井はカトリックを意識するようになった。

その後なんらかの事情で、永井は下宿を浦上にうつしたが、そこで森山緑とであい、また浦上のカトリック共同体の生活にふれたことで、永井はカトリックに接近していったといえよう。

ウィリアム・ジョンストン（Johnston, William, 1925-2010）は、永井の宗教生活に影響をあたえたものとして「パスカルの『パンセ』」、「浦上天主堂のかね」、「森山緑」のみつつをあげている。<sup>45</sup>「浦上天主堂のかね」を浦上のカトリック共同体の象徴とかんがえるなら、これはただしいといえる。また高橋眞司（たかはし・しんじ、1942-）は、永井の洗礼の原因を「母の死」、「パスカルの『パンセ』」、「森山緑」とみている。<sup>46</sup>この「母の死」がパスカルの『パンセ』を経由する間接的な因果関係



であることをみとめるなら、これもまちがいではない。

これらを整理すると、永井が洗礼をうけるにいたった原因は、浦上への移住にはじまり、森山緑とのあい、結婚へとつながる外面的要因の系統と、母の死によるスピリチュアルな覚醒にはじまり、パスカルへとつながる内面的要因のふたつの系統があるといえるだろう。

ただし永井は、自然科学の基礎である唯物主義を最後まですててはいない。それと霊的な世界とは「次元が違う」と、おりあいをつけたのである。<sup>47</sup>この永井におけるカトリシズムと唯物主義との関係については、また別に論じたいとおもう。

## 注

- 1 永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』56ページ。
- 2 後述するように、永井は結婚まえにカトリックに改宗しているので、カトリックの環境で生まれそだったむすこの誠一にとって、それはめずらしいものだった。永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』32ページ。
- 3 『いとし子よ』、『永井隆全集Ⅲ』117ページ。ただしのちにカトリックに改宗した永井は、神道とそのカミガミの欺瞞性を痛烈に批判している。たとえば『ロザリオの鎖』に収録されている「透視室」という、おそらく実話をもとにした掌編で、永井は神道と神道家を批判的に揶揄している。『永井隆全集Ⅲ』、188-94ページ。永井がこのような神道への批判をかけた背景には、神道と国家のむすびつきを禁止する、GHQ/SCAPのいわゆる「神道指令」（「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」、SCAPIN-448、1945年12月15日）があった。
- 4 「高等学校の理科に入って一人一人に材料を任せられ精密実験をした時の感激と驚嘆とは、実に大きなものであった。物理の実験値が公式で理論的に算出した値と実験誤差範囲内でぴったり一致した時の驚異、若い学徒に確かに自然科学は真理を完全に把握したのだという信仰を与えるに充分であった。未知検体の定性分析実験で、試験管内の溶液に酸を加えたりこしたりして、ついにその本態をつきとめて教授から満点をつけられたりすると、若い私は、自然科学は確かに宇宙の真理を探し出す能力をもっていると信ずるのであった。』『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』248ページ。
- 5 『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』143ページ。
- 6 「時は大正であり、世をあげて科学万能を叫び、唯物論を信奉し、宗教などという言葉の口にするのは若人の恥であった。私は科学の魅力のひくままに大学の門をくぐった。』『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』248ページ。
- 7 「大学の講義や実験は、またいっそうの驚異であった。教授は、自信満々たる態度で、理路整然たる一つの美しい体系を微に入り細をうがち説き去った。手際よく配列された標本を示しつつ、荘重な能弁で説かれると、なるほどわれわれ人間はアメーバから進化したのだな、と信ぜざるを得ないほどであった。人体解剖は人の神秘を暴露して余すところはないように見

- えた。生理学では人の思考は単なる脳電流の作用であることが教えられた。若い私は感嘆して、いよいよ自然科学によって真理の把握は容易にできると信じた。図書室に入ってどの原著を引き出して読んでみても、深奥極まりなき理論が実験結果を必ず添えて美しく述べられてあった。私は大学教授というものは真理を把握している人と信じ、教科書や参考書の著者はその方面のいっさいの知識の所有者であると信じ、大学の研究室ではつぎつぎと新しい真理が発見され、人類の手に捉えられていると信じた。私は大学を卒業すると真理を獲得し、これとともに生きるため研究室に入った。『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』248ページ。
- <sup>8</sup> 「……解せないことは、成績のよかった彼が、なぜ、学生のあこがれである東京の大学に行かないで、出雲とは縁もゆかりもない九州のはての長崎医大を選んだかということである。長崎医大は当時応募者が少なく、前年も無試験入学を許したほどであった。負けずぎらいで、がんばりやの永井さんが、すすんで長崎医大を選んだ理由は、今推察することはできない。『永井隆の生涯』33、34ページ。
- <sup>9</sup> 『永井隆の生涯』34ページ。
- <sup>10</sup> 「ところで、私が今も残念に思っていることは、長崎医科大学へ進学した理由を、父に尋ねなかったことである。父が存命中に『お父さん、なぜ、長崎医大に入ったの?』と聞いておけばよかったのだ。『ああ、それは出雲大社の縁結びの神さまの計らいでね、おまえたちのお母さんとお父さんが赤い糸で結ばれていたからさ。』と、照れ笑いしながら、答えてくれただろう。『そうかなあ、お父さん。ぼくは思うよ、それはマリアさまの導きで、お母さんのいる長崎に来たのさ。』と、私は言い返したろう。とにかく、永井は長崎医科大学を志望した理由について、両親や弟妹、幼な友達、学友にもはっきりと話していないし、一切書き残していない」永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』46ページ。
- <sup>11</sup> 「われわれ友人の間では、永井は成績はよいし、東大にいくだろうとうわさしていた。ところが、永井が言うには、田舎の高校からでは難しいし、自分は開業医になる気持ちはまったくない。将来は大学の内科教授になり、研究生活に入りたいと考えている。東大教授になるのには一高→東大という路線があり、見込みがない。しかし、長崎医大なら入れそう。父(寛)が若いときに佐賀と長崎で勉強して、明治末に医術開業試験を受けて、医師の資格を得た所だ。長崎医大なら将来、教授になれる可能性があると思うので、長崎に行きたいと言っていた」。永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』47ページ。ちなみにこのはなしは、馬庭氏の記事(後述)をよんだ永井元が、そのような事実にききおぼえはないと馬庭氏にかきおこったてがみのなかで、自分がききしっていることとして紹介したものである。
- <sup>12</sup> 永井は、自分の父母をモデルにした小説『村医』で、この父寛の医術開業試験の長崎での受験にふれている。ここで主人公の中江登は、永井の父である。「この国家試験は前期と後期と二つ通らねばならなかった。前期は地方で行なわれ、それに通った者が東京で後期を受けることになっていた。登は長崎で前期を受けて通った。それで今、後期試験を受けるために東京へ上って来たところであった。』『村医』『永井隆全集Ⅲ』561ページ。
- <sup>13</sup> 永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』46ページ。
- <sup>14</sup> 永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』46、47ページ。
- <sup>15</sup> 「大学のすぐ北隣に浦上天主堂がそびえていた。東洋一の大聖堂で、一万あまりのカトリック教徒が天主堂を中心に浦上一帯に住んでいた。それまで毎日のように講堂の窓から赤い大きな天主堂を美しいなあと眺めたり、お昼に鳴るアンゼラスの鐘を神秘的だと聞いておりながらも、ときどき白いおおいをかむった葬式の列が天主堂を出て運動場の横の小道を墓へ進むのを見ては、旧式の信仰にだまされている西洋人の奴隷の群れだとさげすむのみで、別に深い興味を起さなかった」。『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』164、65ページ。
- <sup>16</sup> 「父は……尋常小小学年の頃から詩句を作ることに興味を抱き、旧制松江高校時代には短歌会にはいり、詩句の基本を学びました。さらに昭和三年の春、長崎医科大学に入学後、同大前身の長崎医専時代に教授として赴任された斉藤茂吉先生が創られたアララギ支社に入会し歌会などに積極的に参加しました。」永井誠一「序にかえて」、永井隆『新しき朝』聖母の騎士社、1999、1ページ。
- <sup>17</sup> 歌集『新しき朝』は『永井隆全集Ⅲ』に収録されている。
- <sup>18</sup> 永井のいもうとの松田文子の長男・松田岩寛(まつだ・いわお)が、母おやからきいたはなしとして、「母が女学生のころ、長崎に関する歌や、異国情緒の長崎の風景や、ツツジが咲き乱れる雲仙地方のスケッチを写し書きたノート、隆伯父が熱心に見ていた。ことに伯父は万葉集に関心が強く、勉強しており、私の母にレクチャーしていたそうで、異国情緒豊かな長崎の魅力にひかれたのではないかと、母は言っていた」といわれている。永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』48ページ。
- <sup>19</sup> 永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』48ページ。
- <sup>20</sup> 「高等学校で唯物論のとりこになっていたので、医科大学へ入っていきなり死体解剖を学び、これが人間の本体だと教えられた私は、ごく簡単に人間は物質に過ぎぬと思いこんでしまった。人体の全体としての巧妙な構成、細部の精密な組織など、研究すればするほど感心するばかりであったが、結局、私の取り扱っているのはどの面からみても物質であった。次いで生理学を学んだが、複雑のごとく見えて統一された人体内各器官の機能も、動作電流、刺激、反応などと、物理化学において取り扱う現象として説明されては、靈魂などというとはけたものの存在を認めることはむずかしく、またいらぬものでもあった。私は毎日の研究の対象なる死体に向かうと同じ気持ちで、冷淡に私自身の生きた肉体を取り扱いはじめた。肉体は酸素・窒素・炭素・水素・カルシウムなどの元素が有機的に集合したものである。これらの諸元素は、別に尊敬を払わねばならぬわけのものではない。そしてこれらの諸元素が物理化学的方法によって離合集散するのが人生である。わが肉体に尊厳性はない。肉体すなわち人間である。人間にも尊厳性はない。死んだら分解して諸元素に還るだけのことだ。人生は墓までだ。そこへ押し流されるまでを面白おかしく暮らすのが勝ちだ。飲め！歌え！踊れ！遊べ！若き青春の血の冷えぬうちに。私は私の肉体を尊敬しなかったから、これを汚して平気だった。なにか胸の中におさまらぬ波が立つのであったが、これを良心の

- 叫びだなどというのは旧時代の思想だときめてしまった。科学万能の時代だ。実証主義の世の中だ。良心の幽霊なんか過去の忘却の中へ消え失せろ。老人どもがやかましくいう靈魂が実在するならば、さあ、目の前に出してみせろ。青春の快樂をねたんでのたわごとではないか？」『永井隆全集Ⅲ』163ページ。
- <sup>21</sup> 「大学の二年から三年に上がる春の休みに、母が脳溢血で急死した。私がまくらもとに駆けつけたときにはまだ息があって、じいっと私の顔を見つめたままこと切れた。その母の最後の目は、私の思想をすっかりひっくり返してしまった。私を生み、私を育て、私を愛しつづけた母が、別れに臨んで無言で私を見つめたその目は、お母さんは死んでも靈魂は隆ちゃんのそばにいついつまでもついているよ、とたしかに言った。靈魂を否定していた私が見たとき、何の疑いもなく母の靈魂はある、その靈魂は肉体を離れ去るが、永遠に滅びないのだと直感した。葬式を終わって家の中がひっそりとなり、聞きなれた母の笑い声がなくなったが、母のいっさいが無に帰したとは、どうしても考えられぬ私に変わっていた。超自然界への目のはじめて開いたのである。」『永井隆全集Ⅲ』164ページ。
- <sup>22</sup> 「大学の三年生になると各科の外来患者診療の実習が始まる。二年生までは死体を材料とした基礎医学が主であったが、これからは生きた人間を相手に勉強することになった。生きた人間は死体とは違っていった。うさぎやひきがえるなどの実験動物とも違ったものだった。さるとも違っていった。さるの高等なものとも考えられなかった。人間は特別な生物であった。肉体に何かを加えたものが生きた人間だった。」『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』164ページ。
- <sup>23</sup> 「私はパスカルのパンセを読んだ。唯物論のとりこになっていた者が、深い信仰を抱いた科学者の瞑想録をいきなり読むのだから、まるで、天文学の素人が、天体望遠鏡をもたずに星の研究をやるようなもので、足は地を離れず、目は星にとどかず、心ばかりあせってふらふらと宙に浮いていた。たしかにパスカルの言うことは真理だ。しかし、どうしたらそれを実体としてつかむことができるのか？靈魂、永遠、神——ああ、こんなものをわれわれの先輩、大物理学者パスカルがまじめに信じていた！あの古今無双の知者が信じていた！科学者パスカルが彼の科学と何の矛盾もなく信じていたこのカトリック教とはどんなものであろうか？——私の興味はおのずからカトリックに引きつけられていった。」『永井隆全集Ⅲ』164ページ。
- <sup>24</sup> 「浦上は長崎市の北端にあたる地区で、大正年間に市に編入されたものだから、町と名はついていたが、丘や谷に農家が散在して、本原郷、家野郷、中野郷、岡郷、里郷、淵郷、などの集落をつくっていた。」『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』304ページ。
- <sup>25</sup> 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』364ページ。
- <sup>26</sup> この小説で永井は「林隆吉」というなまえで登場する。『永井隆全集Ⅲ』297ページ。
- <sup>27</sup> 「『林先生。あんたがここへおいでしたのは、ご復活の大祝日でしたばい』と、家畜仲買の仕事をしている下宿の主人がいった。」『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』342ページ。
- <sup>28</sup> 『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』165ページ。
- <sup>29</sup> 永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』56ページ。
- <sup>30</sup> 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』304ページ。
- <sup>31</sup> 永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』56ページ。
- <sup>32</sup> 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』304ページ。
- <sup>33</sup> 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』304ページ。
- <sup>34</sup> 「隆吉の下宿している家は、そのキリシタンの中核として、代々帳方（ちょうかた、信者名簿、教会暦の保管者）を務めていたそうであり、今の家も明治の初めに仮天主堂にあてられていた由緒ある家柄だった。十字架、ステンドグラス、西洋いす、キリシタン古文書などが伝えられていた。それは一見何でも無い物品ではあったが、役人に見つかれば、キリシタン法度だから、打ち首が火あぶりか、はりつけだ。それをひそかに幾代かよく隠し通したのと思って見れば、命をかけて信仰を守り通す人間の尊さがひしひしと感じられて、身も心も引きしまるのだった。」『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』304ページ。
- <sup>35</sup> 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』304・06ページ。
- <sup>36</sup> 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』306ページ。
- <sup>37</sup> 「天主堂には全能者の生ける体がある。——隆吉は、信者の中に座ってじいっとしているうちに、この事実を直感した。五千人ばかりの村人が、いと大いなる者の直前にあって、まったくひっそりとしていたから、無きものに等しかった。人間は、全能者の前に出たら、こんなにも小さき者であろうか？こうまで無力な者であろうか？かくも無力で、かくも小さければ、ひとりで立つことはできないではないか？そうだ、できないのだ。全能者の愛の手によりすがらないかぎり、何ひとつできないのだ。しかし、全能者の愛の手にいっさいをお任せしたならば、何ものも倒すことのできない強き者となり、何人からも仰がれる大いなる者となるのである。けれども、倒されぬもの、大いなる者もみな全能者のわざであって、人間そのものは依然として弱く小さい。隆吉は、自分をまったく無とすることによって全能者の愛の手に救われることを、このとき悟った。我は無し、ただ神によってあるのみ。神に直結したとき初めて、隆吉なるものが永遠性を獲得するのである。時間空間を超越して実在する生命を得るのはここだ。隆吉は仰いで頭を上げた。」『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』345ページ。
- <sup>38</sup> 『亡びぬものを』でかの女は、「春野」という名で登場する。『永井隆全集Ⅲ』347-49ページ。
- <sup>39</sup> 「それは、カトリックの教義をわかりやすいことばで問答体で説明してあるのだった。人の求めているものは何か？人にとっていちばん大切なものは何か？人は何のためにこの世に生まれてきたのか？死とは何であるか？靈魂とは何であるか？罪とは何であるか？——そんな重大な問題が、実に明快に解答されていた。隆吉は、その深い内容に、まったくびっくりしてしまった。多くの古人が道を求めてあるいは山に入り、あるいは諸国を遍歴し、滝に打たれたり座禅を組んだりして苦しんだが、その求めてやまなかった真理は、ここにこのように明らかに示されているではないか！隆吉自身がこの数年来苦しみもだえながら求めていた解決は、ここにあったではないか？隆吉は、繰り返し繰り返し勉強した。そうして過去の自分の姿を

- 見直すとき、それがあまりにも世俗の罪に汚れていたのをまざまざと知って、恥ずかしさのあまり、我と我が身の髪の毛をかきむしって泣いた。』『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』361ページ。
- <sup>40</sup> 「その長崎へ隆吉は帰ってきたが、昔の長崎をば、かれは再び踏まないことにした。隆吉はこれから、別の長崎に生きるのである。昔、隆吉がいた長崎——それは、丸山や浜の町や大波止やクラブなどに表現されている、港町としての長崎である。旅人が一夜の恥をかき捨てて戯れる灯の街、女の街、酒の街、歌の街である。隆吉がこれから住む長崎——それは、浦上や西坂や大浦や本河内などに表現されている、信仰の長崎である。聖なる殉教者の血に染められた土地、今生き生きとした信仰を燃やす修道院、養護施設、礼拝堂、慈善会、十字架の町、祈りと勤労の町、犠牲の町であった。』『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』364-65ページ。
- <sup>41</sup> 「もし仮に、島根県出雲市にある有名な出雲大社の、縁結びの神のお告げに従って、氏子の隆が、長崎浦上のキリシタンである下宿の娘に結婚を申し込んだとしたら、どういう結果になったであろうか。娘はその場で、『カトリック教会では、信徒の結婚は、カトリック信徒同士しか認めません』と、即答したであろう。そう言われて、隆が『そんなことを言わないで、是非、私と結婚してくれ!』と、強引に言い寄ったとしても、娘は断つただろう。」永井誠一『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』103ページ。
- <sup>42</sup> 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』351-53ページ。
- <sup>43</sup> 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』365ページ。
- <sup>44</sup> 「隆吉は、それから引き続き天主堂に通い、公教要理のわかりかねる点を質問し、祈りの仕方を習い、しばしば天主堂の祭壇の前に座って黙想し反省した。また、地区の「教え方（かた）さん」と呼ばれている伝道士の家へも通って研究した。一か月ほど研究したら、すでにその前に一年間の勉強があったので、司祭室での公教要理の口頭試問に及第することができた。』『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』366ページ。
- <sup>45</sup> “A deeply religious person, he has written that (like many Japanese intellectuals of his time) he was greatly influenced by the *Pensées* of Pascal. Yet another influence on his religious life was the cathedral bells – echoing and reechoing across the valley and calling him to prayer. ... But the chief influence in his religious life was neither Pascal nor the cathedral bells. Far greater than these was the influence of the woman he loved. It was Midori Moriyama, a Nagasaki Christian and a child of martyrs, who led him to faith.” Introduction. *The Bells of Nagasaki*, viii ページ。
- <sup>46</sup> 『長崎にあつて哲学する』209ページ。
- <sup>47</sup> たとえば「科学者の信仰」『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』を参照せよ。

## 参考文献

### 1) 永井隆

- 『亡びぬものを』、『永井隆全集Ⅲ』サンパウロ、2003（1948 執筆）。
- 『ロザリオの鎖』、『永井隆全集Ⅲ』サンパウロ、2003（1948 執筆）。
- 「この子を残して」『永井隆全集Ⅰ』サンパウロ、2003（1948 執筆）。
- 「村医」『永井隆全集Ⅲ』サンパウロ、2003（1951 執筆）。
- 『新しき朝』聖母の騎士社、1999。

### 2) 一般書

- 片岡弥吉（かたおか・やきち）『永井隆の生涯』サンパウロ、1961。
- 高橋眞司（たかはし・しんじ）『長崎にあつて哲学する』北樹出版、1994。
- 永井誠一（ながい・まこと）『永井隆：長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』サンパウロ、2000。
- Johnston, William. Introduction. *The Bells of Nagasaki*. By Takashi Nagai. Trans. Tokyo: Kodansha International, 1984. v-xxiii.